



「シンプル」→「伝わる・わかる」→「つながる」→「安心」

学校だより

令和 5 年 10 月 2 日
東京都立羽村特別支援学校長
外山 裕介

防災のお話

1923年9月1日に関東大震災が起こったこと、加えて、災害が多い時期でもあることから、「災害に備えつつ知識を深めるため」として、先月、9月は防災月間とされています。

6市2町各地区の活動を防災の取り組みに

私の考える防災の取組のポイントは次のようになります。

(1) ワンパターン脱却の避難訓練

一口に防災と言っても様々な災い（危機）が存在しています。火災や大雨等の気象災害、Jアラート、地震災害などが挙げられます。学校ではそれぞれにどう対応して避難するか、日頃から訓練しておりますが、大規模災害の翌日から、学校再開を想定したものは、引き取り訓練の一部と高等部の宿泊防災訓練のみとなります。また、子供たちが在校していない曜日や時間帯の発災を想定した訓練は行っておりません。このように防災は想像力が決め手です。

余談になりますが、幼いころ見た「日本沈没」という映画で非常に心に残ったシーンがありました。関東に強大な地震が発生します。倒れた家具から這い出したおじいさんは大声で孫たちに叫びます。「火を消せ、早く火の元を確かめろ、関東大震災では火にやられたのじゃ。」と、その途端、大きな津波に家全体が飲み込まれてしまいます。



大事なことはマニュアル通りに動くことだけではなく、正しい知識と想像力を働かせ「最初の判断を自分でして命が助かる事」、それから「周りの人と協力し合うこと」となります。

(2) 居住地域に密着した防災体制の構築

次に、大震災が子供たちの在校時間以外の日曜日や夜中に起こった場合、その翌日から学校再開について想像力を働かせてみましょう。

学校が、まず行わなければいけないことは避難所対応、そして児童・生徒、教職員の安否確認及び被災状況の把握です。現状の連絡手段は電話や「マチコミ」メールによる情報発信しかありません。学区は広範囲にわたります。電話・メールの不通が3日間続くかもしれません。学校は発災から3日後には、精神的ショックと疲労感を抱えながら安否確認と避難所対応を行い、そして授業再開に向け動き出さなくてはならないのです。



この対策のヒントは、各地区別に行うイベントや地区ごと行うPTA活動ではないでしょうか。



具体的には以下のようなことが考えられます。

地区(地域)別活動を活発にし

地区(地域)ごとのネットワークの強化

- 地区別活動を活発にします。お堅いものに限りません。お互い名前を呼びあえるような楽しいイベントである必要があります。地域の福祉イベントに大勢で参加すれば一石二鳥です。
- 地区別活動をベースとして、それぞれの市に地区別防災担当を決めておく。
- 地区別児童・生徒名簿の整備 地区別教職員名簿 担当者名簿などの作成。この同じ名簿に載っている人たちが、その地区の協力者であり仲間であります。



困ったとき、障害に対する理解のある者同士での助け合いは非常に心強いです。同じ地区に住む児童・生徒、保護者が仲良くなり、障害のある未就学児や先輩、他の障害種別の学校の児童・生徒、保護者も集まり、学校でのイベントだけではなく各市のイベントに参加することによって地域の人たちとも顔なじみになる。みんながつながることが将来のリスクに備えることとなります。



「羽村特支のむかし話」

いよいよ開校50周年記念式典が近付いてきました。今回の昔ばなしは、こんなお話です。

10月【クジャクが動物園から飛んできた】

今は、オリに入っていますが、20年位前は放し飼いにされていたのでしょうか。秋の夕方近くになるとクジャクが学校に飛んできて、職員玄関の広いひさしの上で鳴いたり、SBが出た後の駐車場に下りては美しい羽を広げてダンスをしたりして、暗くなる前には、ねぐらに帰っていったそうです。

1ヶ月に2～3回は、来ていたので初めこそ、珍しがられていましたが、慣れてくると「また、来てる～。早く帰りな～」と教員からも声を掛けられていたそうです。



(右上に続く)